様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 22 年 6 月 10 日現在

研究種目：基盤研究（B）
研究期間：2007～2009
課題番号：19401014
研究課題名（和文）ポスト・ビザンティン聖堂壁画の図像学的研究―サラミナ島ファネロメニ修道院壁画修復
研究課題名（英文）The iconographical study for the wall paintings in the Post-Byzantine churches and the conservation of the church of Phaneromeni monastery in Salamina

研究代表者
木戸　雅子（KIDO MASAKO）
共立女子大学・国際学部・教授
研究者番号：10204934

研究成果の概要（和文）：従来西欧及び日本でほとんどとりあげられることのないポスト・ビザンティン美術研究を推進することを目的に、ギリシャにおけるポスト・ビザンティン時代の聖堂壁画を体系的に調査した。それと並行して、本研究の基本文献である１８世紀のアトス山の修道僧ディオニシオス・エク・フルナが執筆した絵画指南書『エルミニア』とほぼ同時期のサラミナ島にあるパナイア・ファネロメニ修道院聖堂壁画を修復し、その実際例として比較研究を行った。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this project is to study systematically for the post-byzantine wall-paintings which have not been interested by the European scholars nor by Japanese in order to develop this realm .The subjects of research are the wall-paintings of churches in Greece ,especially the church of the Panagia Phaneromeni monastery in Salamina where have wall-paintings dated in the same period with the book of Dyonisius of Fourna ,”Erminea”

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	5,600,000	1,680,000	7,280,000
2008 年度	3,900,000	1,170,000	5,070,000
2009 年度	1,600,000	480,000	2,080,000
年度			
年度			
総　計	11,100,000	3,330,000	14,430,000

研究分野：ビザンティン及びポスト・ビザンティン美術史
科研費の分科・細目：人文学Ｂ・美学・美術史
キーワード：ポスト・ビザンティン美術史、壁画修復、キリスト教図像学、ギリシャ、国際情報交換、１８世紀美術史、宗教芸術、修道院

１．研究開始当初の背景

（１）ポスト・ビザンティン時代の美術史はビザンティン時代と比較してまだ体系的な研究が十分に進んでいるとはいえない。その理由は、まず欧米の研究者はコンスタンティノープル陥落以降の美術にほとんど関心を向けないからであり、欧米の研究を基礎にする日本の研究者においても同様である。しかしトルコに支配されたとはいえ、ギリシャでは、引き続きキリスト教が信仰され、聖堂は作られ続け、壁画が描かれていた。ビザンティン絵画技法・図像についての言葉による指南書として重要な文献とされるディオニシオス・エク・フルナ著『エルミニア』（木戸

雅子他訳『東方正教会の絵画指南書　ディオニシオスのエルミニア』金沢美術工芸大学美術工芸研究所、1999）が執筆された１８世紀は特に聖堂建設が活発となる。本書に向けられる関心に比して、それが書かれた同時代の絵画そのものには関心が向けられないことは実に不思議な状況である。本書の執筆意図を考える上でも同時代の絵画がどのようなものであったかを知ることは必要不可欠のはずだというのが、本書を日本語へ翻訳した研究代表者の素朴な疑問であった。1950 年代からA．クシンゴプロスやM．ハジダキスらによるポスト・ビザンティン絵画史は書かれているが、『エルミニア』のほとんどを占める図像篇の詳細な図像の記述に対応する実際の聖堂の壁画研究は稀であり、ギリシャ人以外の研究者はほとんど手掛けていない。近年イピロス地方の聖堂のモノグラフが出版されつつあるが、この地方の聖堂は小規模でありディオニシオスの記述に対応する壁画群は備えていない。そこで『エルミニア』のほとんどを占める図像篇の記述と実際の壁画を体系的に比較研究するのにふさわしい聖堂を探した。2003 年に代表者が長期にギリシャに滞在して研究した際に、サラミナ島の同修道院を予備調査し、この壁画がほぼディオニシオスと同時代であり、際立って規模の大きな聖堂で壁画の場面数が非常に多いことなど、上記の研究対象にふさわしい聖堂であることを確信した。しかし、聖堂内の壁面は一様に煤に覆われ、残念ながら壁画の細部を観察できない状態であった。この研究を進めるにはまずその洗浄・修復が必要となった。

（２）こうした既存の研究が進んでいない文化財を外国人が研究する場合、ギリシャでは多くの制約がある。基本的にギリシャ人研究者による研究が発表されるまでは、たとえ考古局から調査許可を得たとしても、その成果の発表に多くの制約が課せられる場合が多い。外国人がギリシャでのオリジナル研究をするためには、ギリシャ人研究者との共同研究体制を整えることが必要と考え、ポスト・ビザンティン美術研究の第一人者であるビザンティン美術館館長のディミトリス・コンスタンディオス氏と協議を繰り返し共同研究体制を作ることができた。共同研究では双方にメリットがなければならない。壁画研究を妨げている煤を洗浄し、かつ修復するために科学研究費による助成金を得られることはギリシャにとって大きなメリットとなり、日本側にはギリシャ人研究者と同等の立場で研究に携わることができることが今後の研究発展において大きな前進となる。

２．研究の目的

本研究ではポスト・ビザンティン聖堂壁画の宝庫ともいえるイピロス、マケドニア、テサリア、ペロポネソス地方の教会群と、ヨルゴス・マルコスとその弟子たちからなる画家集団がアッティカ地方に残した聖堂の壁画を中心にポスト・ビザンティン時代の聖堂装飾の図像プログラムと各主題の図像を体系的に研究することを目的とする。ビザンティン及びポスト・ビザンティン時代における、ほぼ唯一の言葉による図像学的文献とみなされている、上記『エルミニア』の図像篇の記述と実際の教会装飾とを綿密に比較し、その対応関係を明らかにする。具体的な研究対象として、サラミナ島・パナイア・ファネロメニ修道院聖堂の壁面を覆う 3,500 を超える聖像画群(1735 年)を選び、17 世紀に衰退していた教会装飾が再び活気を取り戻す１８世紀美術の実態を明らかにする。

３．研究の方法

（１）マケドニア、イピロス、テサリア、ペロポネソス地方における 16～18 世紀の聖堂の壁画を調査する。特にサラミナ島のパナイア・ファネロメニ修道院の画家マルコスとその弟子たちによる聖堂とその比較からペロポネソス北部で活躍したカカヴァス一派が装飾したとされる聖堂、18 世紀に壁画活動が活発となるイピロス地方の聖堂、メテオラの諸聖堂を中心に調査した。

（２）サラミナ島パナイア・ファネロメニ修道院聖堂壁画の修復。修復許可申請のための事前調査、考古局への申請、修復許可受諾以後に２期に渡って壁画の修復をした。実際の修復はアテネ国立ビザンティン美術館館長D．コンスタンディオスと同副館長アナスタシア・ラザリドゥ、修復部主任修復家ゲオルギオス・コルコヴェロスを研究協力者として、修復チームを作り実施した。修復の総指揮は館長、実質的管理・指導は副館長、実際の修復は、コルコヴェロスをチーフとするアテネ技術大学（TEI）の修復科の講師や卒業生の修復家たちが実施した。１年目は修復許可申請のための事前調査とその報告書制作、及び正式申請に費やし、許可が下りた後２年目と３年目に実質的修復を行った（計４カ月）。研究代表者と研究分担者は、修復事業の進捗状況を逐次方向を受け、必要に応じて現地に赴き、修道院、考古局アテネ支部の責任者、文化省のビザンティン局、ビザンティン美術館との折衝や協議、打ち合わせを繰り返し、足場に上って壁面を詳細に検証した。

４．研究成果

（１）ポスト・ビザンティン時代の聖堂壁画研究

マケドニア、イピロス、テサリア、ペロポネソス半島、アッティカ地方の目的とする聖堂の調査を行い、確かに１8 世紀が聖堂の建設及びその内部装飾において活発な時代であったことを確認した。修復を進めるファネロメニ修道院聖堂の壁画を修復したマルコ

ス一派の壁画が残るアッティカ地方（アテネを含む）の聖堂を精査し、ペロポネソス半島北部で活躍したカカヴァス一派の聖堂壁画との比較研究を行った。本研究で取り上げた聖堂については、クシンゴプロスによって取り上げられてはいるが、個々の聖堂の情報が少なく、聖堂の所在が明らかでなかったり、聖堂に近づくための道路がなかったりと調査は困難を伴ったが、ビザンティン美術館、や考古局の協力で調査許可を得て多くの写真資料を入手することができた。イピロスの山岳地帯にある聖堂は小規模で、ペロポネソス半島やサラミナ島の聖堂とは様相を異にしている。しかし、カペソヴォの聖ニコラス聖堂をはじめとして、狭い壁面を多くの画像で色鮮やかに埋め尽くしている内部空間が醸し出す世界は、南の聖堂の装飾がもつ聖堂装飾への強い意欲に共通しており、そこに１８世紀が聖堂装飾の一種のルネサンス時代を形成していたことが改めて確認できた。こうした聖堂に描く移動する画家集団の活動を辿って、３年目の調査では、マケドニアからセルビア中部のヤシュニアまで赴き、ポスト・ビザンティン美術が現在の国境を越えて広がっている情況を把握することができた。

（２）サラミナ島パナイア・ファネロメニ修道院聖堂壁画修復

①〔パナイア・ファネロメニ修道院聖堂壁画について〕

歴史：サラミナ島の対岸にあるメガラの出身のランブロス・カネロ（カネロプロス）Λάμπρος Κανέλλο, Κανελλόπουλος（後に修道士ラウレンティオスと名のり、初代修道院長を務めたとされる）により 1670 年に以前の聖堂の廃墟に同修道院聖堂が再建され、1735 年にゲオルギオス・マルク（またはマルコス）Γεώργιος Μάρκου とその弟子たちによって壁画が描かれたことが身廊西壁入り口近くの創建の銘文によって知られる。

装飾プログラム：本聖堂は、中央に大円蓋を持つ三廊式バシリカ式聖堂で、南北の側廊にはそれぞれ３個の小クポールを配す。アプシスの中央コンクには天使を伴う「プラティテラの聖母子」、西壁に「最後の審判（デフテラ・パルシア）」

祭室から身廊に「アカシストス（聖母讃歌）」、「洗礼者ヨハネ伝」「キリスト伝」南側廊天井部に旧約聖書の創世記、北側廊天井部に『詩篇』に基づく「すべて息するものはこぞって」、南北壁とそれに続くアーチ内側等の壁面に「ミノロギオン」に基づく殉教聖人の殉教場面。身廊を取り巻く壁面下部に全身像の聖人、及びメダイヨンに入る胸像の殉教聖人の列で埋め尽くされている。

壁画の現況：聖堂内壁画全体が黒く蝋燭の煤で覆われている。南壁の西側、西壁が外部からの水により壁面表面に塩が浮き上がった状態になっている。西壁の下部は煤の層の下部の剥落が進んでいる。

先行研究：１９世紀初期にギリシャを訪れたヨーロッパの旅行者たちが注目し、旅行記などにその壁画の豊富さなどについて記述している。前述のＡ．クシンゴプロス（A Ξυγγοπούλου, Σχέτιασμα Ιστορίας της Θρησκευτικής Ζωγραφικής μετά την Άλωσιν,1957）やソティリウの研究がある。本研究の研究協力者のビザンティン美術館ラザリドゥ副館長による未出版の博士論文がこの聖堂壁画の画家マルコスとその一派の画家研究を中心とする代表的な先行研究である。（Anastasia Lazaridou, Les Peintures murals de la Panaghia Phaneromeni a Salamine (1735): contribution a l’□uvre du peintre Gheorghios Marcou(XVIII siècle), Thèse de Doctorat, Paris, 2002）

②〔修復許可申請のための事前調査まで〕

ビザンティン美術館館長と副館長、及び修復家と修復実現までの計画をたて、考古局のサラミナ島担当責任者とともに数回現地を訪れて現場での調査を合同で行った。考古局が最も問題にしたのは、聖堂建物の外壁の現状把握であった。外部壁面から水が浸み込んでいる箇所の内側の壁面は修復することができない。そうした箇所にはまず外壁の補修が必要となるからである。修復家たちが屋根に上り外壁の調査を繰り返した。その結果を受けて事前調査の許可申請を行った。

③〔事前調査許可後の事前調査〕

事前調査の許可が降りて、ただちに仮の足場を組み、修復箇所全体の壁画の状態の調査を修復家コルコヴェロス氏が行った。その報告書を作成（約 100 頁）し、それと共に考古局へ修復許可申請を行った。考古局は専門家を含む委員会を開催してその審査をするが、申請直後におきた文化省の事務次官のスキャンダル事件でその委員会の招集が大幅に延びて、実際に許可が下りるまでに７カ月を要す結果となった。しかしそれでも同種の許可申請受諾にかかる期間は通常２～３年といわれ、例外的に早く処理してもらえたことになる。それにはビザンティン美術館館長の尽力が大きかった。

④〔壁画洗浄と修復の実施〕

実際の壁画修復の実施は、2008 年６月に開始し、修道院と考古局を交えた協議で、まず外壁にほとんど問題のない北側廊から着手することになった。修復家は常時 4 名が従事し、2008～2009 年の助成金で実施可能な聖堂内 200 平方メートルの修復が終了した。

北側廊の北壁面（教会暦による聖人の殉教場面、殉教聖人胸像、聖人全身像）、同天井の４つの小クポール（詩篇を主題とする主題）祭室部（日の老いたるもの、大天使等）などをテーマとする壁画の全貌が明らかになっ

た。修復は主に煤を洗浄し、壁面のフレスコがのる層の壁画が浮いている部分を薬品で定着し、壁面が剥落している部分に漆喰を装填し壁面の剥落を止める作業となった。剥落している部分から顔料のサンプルを採取し、アテネ技術大学（ＴＥＩ）の修復科研究室でその成分の分析を行い、ディオニシオスの『エルミニア』の技法篇に記述されている顔料と技法についての研究の貴重な資料を得ることができた。その分析は、同大学専任講師のマリア・パパドプルが行った。

⑤修復によって明らかになったこと

壁面の表面についた煤を通しておおよその図像が判明していた状態であった壁画の図像の細部、色彩が明瞭によみがえり、時代が新しいということもあるが、煤によって壁画表面が保護されていた面もあり、創建時の色彩と図像を目の当たりにすることができた。壁面の観察により、ディオニシオスで言及されている下図（アンシボラ）の使用の痕跡が数箇所で見つかった。大量の数に及ぶ側壁中央段に並ぶメダイヨンの殉教聖人図では、メダイヨンの大きさと聖人の頭部のサイズが合わずにぎこちない印象を与える箇所が散見できるが、こうした箇所からアンシボラの使用痕跡が見つかり、特に重要な聖人ではない場合、労力を省いて制作したことがわかる。

（参考図）パナイア・ファネロメニ修道院聖堂修復前と修復後（左のメダイヨン）北側廊北壁中央部分

顔料研究は進行中であり、その成分等については引き続き分析中である。しかしそのサンプルがとれたことは大きな成果といえる。

（３）ポスト・ビザンティン美術における図像学的研究成果

「ポスト・ビザンティン美術における西欧図像の影響」（　鐸木道剛）

ファネロメニ修道院の中央聖堂の絵画装飾でまず目に付くのは、イコノスタスの上部に取り付けられたキリスト伝の板絵イコンの連作である。その一枚に描かれている上部の銘文に「キリストのアナスタシス（復活）」と記された「復活」のイコンは、ポスト・ビザンティン美術の特徴をよく示している。つまり全体の構図はビザンティン中世以来の伝統的な「冥府下り」として描かれており、中央のキリストは左右のキリスト以前の義人たちの間に現れているのであるが、背景は冥府の地下世界ではなくて地上の山岳であり、冥府に降りてきたキリストの足元には破壊した地獄の扉であるはずが、キリストの石棺とそれを覆っていた石の蓋になっている。伝統的な「冥府下り」ではキリストが持っているはずの十字架は、ここでは十字架の描かれた旗の付いた旗竿となっている。キリストは墓から文字通り立ち上がって復活する姿になっているのである。

これはルネサンス以来、ビザンティン世界における復活を外典であるニコデモ福音書に従って「冥府下り」として空想的に描くのではなく、現実的に実際の石棺から立ち上がるように描くようになる近代的な復活解釈に従っていることを示す。これはルネサンス以来の西欧の合理主義の図像の影響である。同じ中央聖堂の壁画にも西欧図像の影響が見られる。それは聖堂の中央円蓋の第２段に描かれた「ニケア・コンスタンティノポリス信仰告白」の連作絵画化で、その第１行の「天と地の造り主の父なる神を信ず」から最後の第 12 行「永遠の命を信ず」までの図柄のすべては、マルティン・ド・フォス（Martin de Vos 1532-1603)が下絵を描き、ヤン・サドラー（Jan Sadeler 1550-1610）が彫ったオランダ 16 世紀の版画を下敷きにしている。

これは同時代の日本にも見られる現象である。大浦天主堂に伝わる『聖母子と聖アンナ』の銅版画が、マルティン・ド・フォスが原画を描き、ヤン・サドラーが彫版した版画の逆版であることは、パリ国立図書館版画室所蔵の銅版画からわかる。この銅版画には左下に「1596」、右下に「ariy」との書き込みがあり、1596 年に有家で制作されたとも見なされうるが、西村貞は、この年記と有家との文字は墨書であることから、輸入原版に後に日本で墨書文字を書き込んだ可能性を示唆している。またマルティン・ド・フォスが描いて、ヒエロニムス・ウィーリクス（Hieronimus Wierix 1551/2-1619）が彫った『救世主キリスト像』（現東京大学総合図書館蔵）が 1597 年の年記のある銅版に油彩で描かれた『救世主キリスト像』の原画になっている。このウィーリクスは、アントワープの版画彫刻師で、ヤンとアントンとともにヒエロニムス・ナタリス（ナダール 1507-80 年）が編集した『エヴァンゲリア（Evangelicae Historiae Imagines)』1593 のためにベルナルディノ・パッセリ（1540 頃-1596）が描いた原画を版刻したことで知られる。ナダールはスペイン出身のイエズス会士神学博士で、「第二のロヨラ」と称された神秘思想家で、彼が編纂した『エヴァンゲリ

ア』あるいは『福音書注解と観想（Adnotationes et Meditationes in Evangelia)』(1595 年）はイエズス会総会長の意志によって綿密な計画もとに着想され版刻された記念碑的出版物で、イエズス会の世界伝道とともに、イエズス会が世界中に運んだ。日本にも導入されたことが現存する作品からわかるが、それがもたらされたとの文献記録は、中国にはマテオ・リッチらの手紙などがあるが、日本にはない。西村貞は 1941 年刊行の『日本銅版画志』のなかで、「数年前、大阪で複製された岸和田天主公教会マキシム・プイサン師解題の基督絵伝」が、「天主の恩寵により迫害の火をまぬがれて伝わったゼローム・ナタリス監修、ド・ヴォス及びパッセリ原画、ウイリクス三兄弟銅刻の古版」であることを伝え、この銅板連作が「ひとり支那のみならず夙に本邦にも将来され」たことは明らかと記している。また神戸市博物館のザビエル像の原画が、オラティオ・トルセリーノ（Horatio Torselino 1544-99）の『聖ザビエル伝』(第 2 版、フィレンツェ、1589 年）の口絵に、同じヒエロニムス・ウィーリクスが彫った銅版画の『フランシスコ・ザビエル像』であることは夙に新村出によって指摘されている。

正教図像へのカトリック図像の影響は、早くも 16 世紀始めから見られ、ルードヴィヒ・ハイデンライヒ（Ludwig Heinrich Heydenreich）は 1939 年の論文で、アトスのディオニシオス修道院の壁画に描かれた黙示録場面が、ホルバインの版画の模写であることを明らかにした。ハイデンライヒは、ホルバインのプロテスタント図像の借用について、反カトリックとしてプロテンタントと正教会との連合が、図像の借用の成立の理由であり、1573 年と 1630 年の間のカルヴァン派との連合の試み、特にカルヴァン主義によって正教会を改革しようとした総主教キリル・ルカリス（Kyril Lukaris 1572-1638）の存在が借用の背景にあるとしているが、その後はイエズス会の図像も流入することから、ハイデンライヒの解釈は一般化できず、再考する必要がある。西欧図像の借用は 19 世紀末まで続き、ビザンティン滅亡後の正教世界の盟主を自任していたロシアにおいても、対トルコ戦争をきっかけとするロシアの民族主義の台頭によって、正教の伝統の牙城としての自意識の高まりとともに、1880 年頃から美術において中世ビザンティン美術を模範とするようになるときまで、西欧図像の流入は続いた。最後の例と考えられるのが、ナポレオンへの戦勝記念にモスクワ川の河畔に建築された救世主キリスト聖堂の壁画制作の重要な部分が、1876 年にペテルブルグ美術アカデミーの出身のポーランド人画家でカトリックの画家ヘンリク・シエミラツキ（Henryk Siemiradzki 1843-1902）に託されていることである(1883 年成聖)。大画面の歴史画で著名であったシエミラツキは、アプシス最奥部に『最後の晩餐』を描いている。なおこのシエミラツキの『最後の晩餐』は、イコンの図柄としてひろく正教世界で模写されており、アトスにあるロシアの修道院のひとつであるアンドレイ修道院のイコノスタシスやセルビアのクルシェヴァツ（Krusevac）の聖ジョルジェ聖堂（1904 年成聖）のイコノスタスのイコンに描かれている。日本の正教会にも、京都の正教会（1903 年）にロシアからもたらされたエパネチニコフ工房のイコノスタスと、松山の教会（1908 年成聖）にもたらされたグリヤノフ工房のイコノスタス（1907 年の年記あり）に、シエミラツキの図柄の最後の晩餐が描かれているほか、高崎の正教会にも同じ図柄のロシア・イコンがある。日本のイコン画家である山下りん（1857-1939）が京都のイコンを模写したことについては、正教会の女子神学校が発行していた『裏錦』第 128 号（1903 年 6 月 15 日刊行）や宣教師ニコライの日記に記述があり、彼女の遺品にはイコンをスケッチし、それ以降は下絵として利用したもの（下絵として利用するイコンのスケッチはロシアでは「ポドリンニク（podlinnik)」、ギリシアでは「アンシボラ（anthibola)」と呼ばれる）もある。山下りんは、この図柄の『最後の晩餐』を描いて、最後まで自室の長押に掛けていた。彼女はまた同じ図柄のイコンを他に 4 点描いている。

ギリシアにおいても状況は同じである。ナフプリオンの聖ゲオルギオス聖堂には、アプシスの手前の天井に、レオナルド・ダ・ヴィンチのミラノの『最後の審判』が巨大に拡大されて描かれているし、同じ聖堂の祭壇部内部の柱面に描かれた『ペテロの不信』はライプチヒで 1852 年に出版されたプロテスタントの画家であるシュノル・フォン・カロルスフェルト（Julius Schnorr von Carolsfeld 1794-1872)の『聖書挿絵(Bibel in Bildern)』から図柄が借用されている。アテネの聖堂にはヴァチカンにあるラファエルの油彩画の『変容』を下半分のエピソードも含めて、そのまま借用している 1859 年の年記のあるイコンもある。

ポスト・ビザンティンにおけるカトリック図像の影響は意外であるが、大きく、教義の対立とは別に図像の流入があった。その意味は、大いに考察に値する問題である。

ファネロメニの壁画における西欧図像の影響は、おそらく聖堂の南側廊に描かれた「天地創造」の連作にも見られ、今後の修復によって全体像を明らかにしさらに検証を進める予定である。

ほぼ同時代、1737 年献堂のセルビアのボジ

ャニ修道院の聖堂にも、身廊部分に詳細に「創世記」が連続20場面で描かれており、「ヤコブの夢」のエピソードまで絵画化されている。壁画を制作したクリストフォル・ジェファロヴィチ（Hristofor Zefarovic ?-1753）は、オスマン・トルコ支配下のマケドニアに生まれ、アトスに滞在したのち、1741年にウィーンで中世セルビアの王族の系譜を『ステマトログラフィア』として銅版で印刷して、セルビアの民族主義を高めたことで知られる。その後、エルサレムに巡礼して、『エルサレムの記（Opisanije Jerusalima）』を1748年に出版したのち、モスクワの修道院に入って、そこで没した。ギリシアでは彼はクリストフォロス・ジェファールとして知られ、ヴェネチアで活躍した（？）セルビアの職人として、その版画が、ヨアニナの修道院のために制作された聖母子のイコンの図柄に忠実にコピーされていることが指摘されている。しかし彼が描いた最も重要な作品であるボジャニ修道院の壁画については、隣国のギリシアにおいても知られていない。

このファネロメニ修道院とボジャニ修道院での壁画における「創世記」絵画化は、互いに直接の影響関係はないことは、両者の「ノアの箱舟」の場面を比較してもわかる。ボジャニの場合はオーストリア・ハンガリー帝国領にあったこともあり、ウィーンのカトリック美術の影響が考えられる。しかしこのふたつの修道院が、同じ創世記主題を聖堂の壁面装飾に取り上げていることは偶然の一致ではなく、今後、西欧図像の正教会図像への流入の意味を、教義と視覚イメージとの関係も含んだ広い視野で考察する必要がある。

（４）本研究の研究成果発表

本研究課題の成果発表として2009年3月18日にアテネのビザンティン美術館で研究成果報告の研究シンポジウム「サラミナ島パナイア・ファネロメニ修道院聖堂壁画修復―ギリシャ・日本共同研究の成果―」を開催した。発表者はディミトリス・コンスタンディオス・ビザンティン美術館・館長、アナスタシア・ラザリドウ副館長、研究代表者・木戸雅子、連携研究者・鐸木道剛。参加者は文化省ビザンティン局局長、在ギリシャ日本国大使他約100名の研究者。このシンポジウムとその内容について大手日刊紙「エレフセロティピア」が紙面を大きく割いて報道し、こうした両国の共同研究の意義と文化財保護における意義の両面から大きく評価するなど社会的に大きな反響があった。

（５）今後の展望

本研究でパナイア・ファネロメニ修道院の北側廊と祭室の一部の洗浄・修復が終了し、当初の予想通り、本研究の骨子である１８世紀ポスト・ビザンティン図像の研究にとって重要な聖堂装飾であることが明らかになった。そのため引き続き残りの聖堂内壁画全体の洗浄と修復を行い聖堂装飾の全体像を明らかにする必要がある。外壁から水が浸入している箇所に関して、文化省側から修復許可の条件として課せられていた外壁の補修について、修道院側がその補修を進めたので、第二期の修復調査研究に直ちに着手できる状況にある。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）

①木戸雅子、サラミナ島のパナイア・ファネロメニ修道院の壁画修復、日本ギリシャ協会会報、第121号、2009、5-8

②木戸雅子、ギリシャ独立戦争の表象―フスタネラ、国際服飾学会会誌、査読有、34 巻、2008 ,4-11

〔学会発表〕（計3件）

①木戸雅子、サラミナ島ファネロメニ修道院壁画の修復とその研究、サラミナ島ファネロメニ修道院壁画修復シンポジウム、於ビザンティン美術館(アテネ)、2009年3月18日

②鐸木道剛、日本におけるマルタン・ドゥ・ヴォス：ファネロメニ修道院壁画との比較、サラミナ島ファネロメニ修道院壁画修復シンポジウム、於ビザンティン美術館（アテネ）、2009年3月18日

③木戸雅子、ディオニシオス・エク・フルナ『エルミニア』の日本語への翻訳、ディオニシオス・エク・フルナ･シンポジウム、イアノス・ホール（アテネ）、2008年5月27日

６．研究組織

(1)研究代表者

木戸　雅子（KIDO MASAKO）

共立女子大学・国際学部・教授

研究者番号：10204934

(２)研究分担者

鐸木道剛（SUZUKI MICHITAKA）

岡山大学大学院・社会文化学研究科・准教授

研究者番号：30135925

(H20→H21連携研究者)

(３）研究協力者

①ディミトリス・コンスタンディオス・ビザンティン美術館（アテネ）・館長

②アナスタシア・ラザリドゥ・ビザンティン美術館・副館長

③ゲオルギオス・コルコヴェロス・ビザンティン美術館（アテネ）・修復部主任